

大橋久利編

『カンボジア——社会と文化のダイ  
ナミックス——』

古今書院 1998年 vi + 227ページ

あまがわ なおこ  
天川直子

カンボジア研究は、アジア経済研究所においても木村哲三郎編『インドシナ三国の国家建設の構図』（1984年）に含まれている秋山民雄論文および糸賀滋論文以後、動向分析事業と「インドシナの経済復興と国際経済協力」（国際シンポジウム報告書 1992年）におけるヴィカリー（M. T. Vickery）論文を貴重な例外として、近年ほとんど行われてこなかった。こうした学術的状況は当研究所のみならず日本全体についても同様である。この20数年間、「カンボジア問題」について国際政治の側面から分析したものは散見されるものの、カンボジアの社会経済に関する調査研究はごくわずかである。

このような学術的状況が生じたのは、1970年代前半に内戦が本格化して以来、カンボジア国民の生活が常に戦乱と社会混乱にさらされ続けたためであった。鎖国政策をとっていた波尔・ポト政権が崩壊した後も、冷戦体制が崩壊し、カンボジア和平交渉が本格化する1980年代末までは、西側諸国の研究者による当時の社会経済状況に関する調査研究はわずかにヴィカリーとカーティス（G. Curtis）の手になるものを数えるのみである。

したがって、本書の意義はまず、上述のような長きにわたった学問的空白を埋めようとする試みそのものにあると言えよう。

本書は、1993～94年度の文部省科学研究費補助金による共同研究プロジェクトである「カンボジアの社会・文化に関する現状分析及び展望」の成果である。序章を含め全7章からなっており、1993年総選挙直後のカンボジアの状況を多角的に報告するもの

となっている。以下、各章の内容を簡単に紹介したい。

序章「激変のカンボジア50年」でこの国の歴史を概観したのち、第1章「カンボジア人の政治意識」では、カンボジア国民を構成している各集団別に、支持政党、シハヌーク国王や僧侶への尊敬度、クメール・ルージュへの態度などが調査、分析されて示されている。

第2章「カンボジアにおける少数民族」では、諸機関からの聞き取り調査やインタビューを通じて、語られることは多いもののその実態については明らかにされていないカンボジアにおけるベトナム人の実状について迫っている。

第3章「カンボジア文学紹介」では、カンボジア文学の形態別分類が説明された後、代表的作品の概要が紹介されている。

第4章「カンボジア経済復興の現状」では、1993/94年当時の経済概況や復興援助の状況について報告されている。

第5章「カンボジア社会の変動とカンボジア語」では、波尔・ポト政権、ヘン・サムリン政権および1993年総選挙によって樹立された連立政権のもとにおける社会体制を考慮して、各時代に特徴的な単語と表現が整理されている。

第6章「カンボジアにおける仏教実践」では、波尔・ポト時代に徹底的な弾圧をうけ、事実上消滅したカンボジア仏教が、1979年以後、どのような過程を経て今日見られるような姿に復興してきたのかについて明らかにしている。

このように社会と文化の多方面にわたる調査によって、今日のカンボジアの姿を描き出そうとしているのが本書である。初学者が手軽に読める日本語文献としては、1996年に出版された『もっと知りたいカンボジア』（弘文堂）に次ぐものである。この2著をとともに読むことによって、カンボジアの社会・経済・文化の移り変わりの様子とその今の姿の一端が理解できるであろう。

（地域研究第1部）